
星に願いを

絶氷のシア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
星に願いを

【コード】
N0659T

【作者名】
絶氷のシア

【あらすじ】
けいおん！のほのほの二次SSです。唯と憂が星を見る！というお話です。

ジャカジャカ

晩御飯を終え後片付けをしていると、リビングではお姉ちゃんがギターを持ち出して練習していました。

最近では毎日見る光景です。

ギターを始めてからのお姉ちゃんはとってもいきいきと見ている私も嬉しくなります。

「張り切ってるね、お姉ちゃん」

後片付けが終わった私はテーブルを挟んでお姉ちゃんに向かいに腰かけました。

「あ、憂。デザートは？」

「今夜はスイカです」

ジャン、と擬音が合いそうな仕草で4分の1にカットしたスイカをお皿にのせます。

「おおー、おっきいー！」

「うふふ、はいスプーン」

「あ、ありがとう」

目をキラキラさせて私からスプーンを受けとるお姉ちゃん。

けれど、何故かお姉ちゃんはスイカを食べようとしません。

どうしたんだろう？

「憂、どうせなら縁側に腰かけて食べな〜い？」

お姉ちゃんの口から唐突に発せられた言葉。確かにこの時期なら全然問題無いと思うけれど…。

「いいけど、なんで急に？」

「そ〜ゆ〜気分なの！それになんか風流じゃない〜？」

お姉ちゃんてばいつも唐突なんだから。

でも私もそれに賛成したいと思います。

「わかった。じゃあ縁側に行こつか」

「わ〜い」

両手を上げて本当に嬉しそうに喜ぶお姉ちゃん。

そのままお姉ちゃんはスイカの乗ったお皿を持って縁側に歩み寄ります。

「待っててね、今開けるから」

「いつもすみませんねえ」

「いえいえ」

窓を開けると涼やかな風が髪を撫で、部屋の中も涼しくなったような気がします。

お姉ちゃんはクーラーが苦手なため、家のエアコンはおやすみ中です。

チリーン、と風鈴の音も相まってでしょうか。

より一層涼しく感じました。

「憂もはやく〜」

一足先に縁側に腰かけていたお姉ちゃんが私を急かします。

「ちよつと待っててね」

自分のスイカを取りに行き、お姉ちゃんのところまで戻ります。

「お待たせ」

「いえいえ お隣ど〜ぞ」

「失礼します」

言われるままに私はお姉ちゃんの隣に腰かけます。

お姉ちゃんは一足先にスイカを頬張っていました。

「おいし〜い！」

となりからシャリシャリと心地いい音が響いてきます。

…っ！

「お姉ちゃんスプーンは!？」

「ふえ？」

気づけばお姉ちゃんはスプーンを使わずにスイカをかじるようにして食べていました。

見れば口の端には種が。

スプーンは必要なかったかな？

「あ、忘れてた」

「んもう」

私は苦笑しながら自分のスイカにスプーンを入れ、自分の口に運びます。

ん、ひんやりしてて美味しい

「ごちそうさまー」

「速い！？」

まああの食べ方なら速いのも当然だけど…。

見るとお姉ちゃんのスイカは綺麗に皮だけ残っていました。

「美味しかったー」

「私、座ったばかりなのになー」

なかば呆れながら私は自分のペースでスイカを食べます。

「えへへ、つい」

「うふふ。あ、種がいつぱいついてるよ？」

言いながら私は布巾でお姉ちゃんの口の周りをぬぐいます。

よし、綺麗になりました。

「ありがとうございます」

言ってお姉ちゃんはふと空を見上げます。

「うわー！お月さまとお星さまが綺麗だねー」

釣られて見上げてみるとそこには真ん丸の月と満点の星空。

夜空に浮かび上がる景色を見つめるととってもロマンチックです。

「本当だ！綺麗だねーお姉ちゃ、ん？」

隣を見てみるとそこにいるはずのお姉ちゃんの姿がありません。

どこに行っただろうと探してみると、庭で横になりながら星空を

眺めていました。

「お姉ちゃん汚れちゃうよ？」

「この方が首疲れないんだもん」

しょうがないな。

私は急いでスイカを食べ終わると、家のなかに戻ります。確かまだあれがとつてあつたはず。

数分で目的のものを見つけて私はお姉ちゃんのもとに駆けつけました。

「お待たせ〜」

「あ、憂。それな〜に？」

「ピクニックシートだよ」

私は腕に抱えていたシートを広げます。

「お〜、頭いい〜」

「えへ〜」

広げ終わるとお姉ちゃんはころころとシートの上に転がり、私もお姉ちゃんの隣に横になりました。

その瞬間、視界に映るのはキャンパスに描いたような幻想的な夜空。まるで別世界に来てしまったような感覚にちよつと酔いしれてしまひそうです。

「きれいだね〜」

「うん…」

声をかけられても返せる言葉はそれが限界で…。

それくらい感動しています。

「そつだ!!!」

今度は何を思い付いたのか、お姉ちゃんは立ち上がつて家の中まで走り出しました。

私はその体勢のまま家に入っていくお姉ちゃんを目で追います。

お姉ちゃんが見えなくなり、私は再び空を見上げます。

まるで自分も空に浮かんでいるような…。

そんな錯覚を感じながら私は輝く星々に釘付けになっていました。しばらくして戻ってきたお姉ちゃんが持ってきたのはさつきまで弾いていた相棒ギータ。

「おまたせ〜。お嬢さん、お隣いいですか？」

「おかえり〜。うふふ、どうぞ」

他愛のないやりとりを交わしてお姉ちゃんは私の隣に腰かけます。
ギー太の弦をジャランと引いたかと思うと、ゆっくり演奏し始めました。

「き〜ら〜き〜ら〜ひ〜か〜る〜 よ〜ぞ〜ら〜の〜ほ〜し〜よ〜

」

それは誰でも一度は聴いたことのある童謡きらきらぼし。

今この目に映る景色にとっても相性の良い曲でした。

私も嬉しくなつて一緒に歌い出します。

「ま〜ば〜た〜き〜し〜て〜は〜 「」

私とお姉ちゃんはお互いを見つめて微笑みます。

「み〜ん〜な〜を〜み〜て〜る〜 「」

そして二人でまた空を見上げました。

「き〜ら〜き〜ら〜ひ〜か〜る〜 「」

キラツ ミ

すると私たちの目に映ったのは流れ星。

「よ〜ぞ〜ら〜の〜ほ〜し〜よ〜 「」

ジャラ〜ン。

歌が終わり、お姉ちゃんの演奏が止まります。

「流れ星あつたね〜」

「そつだね。私初めて見たよ。」

お姉ちゃんと見た流れ星はとってもキラキラしていて。

お月さまとお星さまとの間に輝くアクセントになって。

一瞬だったけれど、目を奪われてしまいました。

「憂、願い事した？」

「全然。考える前に消えちゃってた。」

言ってお互いに笑い出します。

本当に一瞬の出来事だったので、願い事を考える暇もありませんでした。

流れ星つて本当に一瞬なんですネ。

「あ！でも願い事はあるよ。」

「お！憂の願いはなんだね？」

興味深げに聞いてくるお姉ちゃん。

私の願いはただひとつ。

少し恥ずかしいけれど…私はお姉ちゃんの方を向いて答えます。

「それはね…お姉ちゃんともっと仲良くなれますように、だよ！」
そう。

それが私の…。

たったひとつの願いです。

それを聞いたお姉ちゃんはすごく嬉しそうな顔になりました。

「すごいね憂！私と一緒にだね！」

「え？じゃあおねえちゃんも？」

「うん！憂ともっと仲良くなれますように、だよ！」

嬉しい…。

お姉ちゃんも私と同じことを願っていてくれていたなんて…。

「これからもっともっと仲良くなるうね、憂」

「うん！」

二人で頷き合い、また星の海を見上げます。

すると。

キラッ ヽ

また一筋の流れ星。

流れ星つて一晩でこんなに見られるものでしょうか？

驚いてお姉ちゃんを見ると、お姉ちゃんも私に目を向けていました。

「ねえお姉ちゃん」

「なに？」

「流れ星つて一晩に二回も見れるの？」

「わかんないけど…たぶん見れないと思う」

やっぱりお姉ちゃんも同じことを考えていたようで。

頭が混乱気味のまま二人でまた空を見上げます。

同時に視界に飛び込んで来たのは三度目の流れ星。

そしてそこからは溢れ出すように流れ星が流れ始めました。

ひとつが流れて。

その流れ星が消えては次の流れ星が流れて。

まるで星空という会場でたくさん流れ星がコンサートを開いてくれているようでした！

「すごい！すごいね憂！」

「うん！すごいねお姉ちゃん！」

私とお姉ちゃんは手と手を組みながら跳び跳ねてしまいそんな勢いで感動してしまいました。

「ようし！憂、私たちも負けてらんないよ！」

お姉ちゃんは気合いを入れてギー太を持ち直します。

「うん！そうだね！」

意図を汲んで私も頷きます。

お姉ちゃんが演奏とともに歌い出し、それにならって私も歌います。私たちと流れ星のコンサートが始まりました。

それからしばらくの間私とお姉ちゃんは、星がながれ瞬く夜空を眺めていました。

次の日。

朝の登校途中。

「あたたた…」

「お姉ちゃん、首が疲れるからって言うてたのに」

「だってギー太を持ってたら上手く横になれなくて…あたたた」

ギー太を持ち出したあとのお姉ちゃんは横にならないで座ったまま見上げていたせいか、首を痛めてしまったみたいでした。

「お姉ちゃん」

「うん？どうしたの憂？」

痛いはずの首の向きを変えて私の方を見てくれるお姉ちゃん。

「私たち…もつと仲良くなれたかな？」

「もちろんだよ…！」

お姉ちゃんは私の問いに即答してくれました。

私は嬉しくなつてちよつと泣きそつになつてしまひそつです。

「おーす、唯！」

ばしんつ！

「いったーいっ！」

律さんの確に急所を狙い撃ち。

お約束ですね。

おしまい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0659t/>

星に願いを

2011年6月3日05時08分発行